

## 育児相談の歴史的変遷

- 100 年間における育児相談の内容の変化から -

東北福祉大学大学院 博士課程 日野さくら ( 8152 )

キーワード：育児相談・育児の能力・育児不安

### 1. 研究目的

近年、少子化などを根拠に育児に関する研究において様々な見解が述べられている。その一端が、育児の環境の危機、家庭の育児の能力の低下との主張である。これら育児の能力の低下に対応するべく登場してきた考えが育児（子育て）支援であり、この見解に基づく多くの研究は、“育児の能力は低下している”との立場から論じられている。

しかし、現在までの先行研究を点検すれば、育児の能力について具体的な内容を示しているものや低下した客観的事実について触れられているものは極めて少ない。加えて、育児の能力が過去からあったと仮定すれば、育児への不安はなかったのか、仮にあったとすればどのように対応されていたのか。過去の実態を踏まえた上で育児の能力は低下しているのかについて論じ、これらを踏まえた上での育児支援のあり方についての検討は未だ希薄な状況である。

そのため本研究では、育児の実態として育児不安を取り上げ、1900（明治 33） - 2000（平成 12）年までの育児不安の内容について概観する。

### 2. 研究の視点および方法

本研究では、育児の具体的な中身である実態を捉えるために、育児書・育児雑誌・新聞に掲載された 1900（明治 33）年から 2000（平成 12）年までの「育児相談」の一端を取り上げ、内容がどのように変化するのかについて追っていく。なぜなら、読者投稿欄に手紙を送るという経緯を考えれば、そのとき最も困っている事柄が取り上げられていると推察されるほか、掲載に関してはより多くの養育者が悩んでいる内容が取り上げられていると考える。また、読者投稿欄とは育児書に書かれている方法論や解決策の行間に漂っている『本音の部分』<sup>1)</sup>であることから、この項目に着目するには意義があるもの考える。

育児相談の項目は、日本保育協会が編集した『子育て相談の手引き』<sup>2)</sup>を参考にし、大項目として基本的生活習慣、発育・発達、医学的問題、生活環境、育児方法の 5 つに分類する。中項目として、基本的生活習慣は 5 項目（睡眠、授乳等）、発育・発達は 6 項目（歩行、言葉等）、生活環境は家庭、近隣・地域の 2 項目、育児方法は健康、しつけ・教育の仕方の 2 項目に分類する。

そして、年代ごとの育児相談の内容を検討するため、ここでは 1900-1929 年、1930 - 1959 年、1960-1967 年、1968-1972 年、1973-1985 年、1986-2000 年の 6 つに区分する。年代の区分には幅があるが、その根拠として、1900-1959 年までの年代の区分については、社会

全体を動かすような主だった動きは労働に関する法律では見られないことから、30年を一代と捉えた。1960年以降は高度経済成長期や男女雇用機会均等法などの社会的動向を考慮し、30年区切りでは捉えきれないため、1960年以前の世代区分とは一線を画している。

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、引用・参考文献等を厳密に明記するなどの倫理的配慮を行った。

### 4. 研究結果

1900(明治33)年から2000(平成12)年までの100年間を前述の通り暫定的ではあるが、6つの年代に区分した際、複数の区分に共通している育児相談を育児において共通している悩みをみてとることができる。具体的な相談の中身としては、夜泣きや眠る姿勢に関する相談や、母乳が出ないことと子どもの生育状況の関係、適切な衣服の枚数や衣服の種類や素材についての内容が挙げられている。一般的に「昔は三世代家族或いは、きょうだいが多い中で育つことで、育児の仕方が受け継がれていたが、近年核家族化が進み、育児における負担感や不安から、家庭の育児の能力が低下した」といわれる。しかし、1900(明治33) - 1929(大正4)年の質問内容をみると、適切な衣服の枚数や子どもの叱り方など、育児の能力が低下しているとされる現在と共通する項目が数多くみられる。例えば、2000(平成12)年にも1910(明治43)年にも共通する相談があることから、育児の能力の低下とはどういうことであるか、何を指すものなのか、疑問を抱かざるを得ない。したがって、育児の能力の低下が述べられる際、根拠なく吟味されていないことが見いだせるのではないかと。枕詞のように、「育児の能力の低下」がまことしやかに述べられては、養育者の不安をあまり、育児が困難なものであるというイメージを持ちかねない。

これらの育児相談の変遷から、育児とは、授乳し、おむつを交換し、遊び、入浴し、睡眠をとり、来る日も来る日も当たり前のことを丁寧に根気よく続けること以外の何ものでもない<sup>3)</sup>といえる。このことから、育児書の内容からも育児の仕方や育児不安の幅というのはどの年代をとっても、大差がないのではなかろうか。

以上のことから、時代背景が異なっても、普遍的な育児相談の内容が存在する以上、一概に育児の能力が低下したとはいきれないであろう。つまり、育児の能力が低下しているのではなく、育児に対する不安が高まっているという見解を主張したい。

今後の課題としては、育児に限らず本やインターネット等を用いることで困っていることについて調べることが容易になったにも関わらず、解決しえない普遍的な悩みや育児不安の高まりに対して、その要因または契機を検討することがあげられる。

---

<引用文献> 1) 田中千穂子『子育て不安の心理相談』大月書店、2004年 p.14

2) 社会福祉法人 日本保育協会編『子育て相談の手引き』シンソー印刷、1992年 p.7

3) 池坊保子『子育てって、ホントに損かしら?』ポプラ社、2001、p.25